

## 巻 頭 言

東京女子医科大学医学部神経内科学

ウチヤマシンイチロウ  
内山真一郎

私は北海道大学医学部を卒業後、直ちに東京女子医科大学の研修医となり、2年間の米国留学と短期間の関連病院の出向を除いて40年間のほとんどを本学で過ごしたことになります。今振り返ってみて改めてその長さに驚いています。この間には様々な思い出がありましたが、特に印象に残っていることが2つあります。

一つ目は、長嶋茂雄読売巨人軍終身名誉監督が心房細動による脳塞栓症で当科に緊急入院し、主治医として診療に当たったことです。戦後日本の最大のヒーローであり、知らない人はいないほどの有名人であり、ギリシャオリンピックの代表監督も予定されていたことから、長嶋監督の入院に対する当時のメディアの注目度にはすさまじいものがありました。病状を説明する記者会見には弥生記念講堂を埋め尽くすほどのメディア関係者が集まり、全国の衆目の中、緊張が極限に達した状態で会見に臨んだことが強烈な印象として脳裏に焼き付いています。当時は一歩病院の外に出ると芸能人かのごとく世間の目が注がれる状態になってしまい、メディアには自宅にまで押しかけられ、息が詰まりそうで生きた心地がしませんでした。結果的には、急性期の危険な状態を無事乗り越えられ、3週間で回復期リハビリ病院へ転院していただくことができ、転院日にお見送りした後、近所のレストランで診療スタッフと飲んだビールの喉越しと安堵感が今でも忘れられません。

二つ目は、東日本大震災の年に会長として開催しなければいけなかった日本脳卒中学会総会の思い出です。規模の大きな学会ですので医局員と相当前から周到な準備をしていたのに、開催直前になって東日本大震災に見舞われてしまったのです。この事態に直面して目の前が真っ暗になり、医局員ともども途方に暮れてしまいました。学会の理事達からは、このような状況下で開催を強行するのは不謹慎であり、中止すべきだとの意見が寄せられたり、開催予定だったホテルからは莫大な違約金を請求されたりと、当科の歴史上最悪の危機に直面しました。しかしながら、学会員から寄せられた多くの励ましと支援を受け、医局を挙げての懸命な努力の結果、開催期間と開催地を真夏の京都に移して開催する運びとなりました。それでも震災後であり、夏休み真只中の暑い京都での開催に何人参加してくれるか不安でしたが、いざ蓋を開けてみると続々と参加者が詰めかけ、最終的には学会史上最高の参加者数を記録することとなり、奇跡ではないかと感激しました。学会では会長招宴などの華美な行事を一切省きましたが、この困難な状況下で参加してくれる会員のために残した懇親会ではせめてものおもてなしのつもりで医局員に浴衣を着てもらい、会場の国立京都国際会館の庭園で池と緑に囲まれた野外の懇親会を行おうと企画したのですが、あいにく当日は朝から雨でした。ところが再び奇跡が起こり、直前に雨が上がり、星空の下で懇親会を行うことができたのです。大震災後で放射能汚染の風評も拡がる中で参加してくれた勇気ある海外招待演者達にも急遽浴衣を着てもらい、とてもなごやかな雰囲気での懇親会場となり、参加した会員達にも一生忘れられない学会になったと喜んでもらえました。未曾有の大震災を通じて多くの日本人が絆の大切さを確認した年でしたが、この困難だった学会の経験を通じて医局員全員と絆の大切さを実感できたことは私にとっても大きな財産です。

研究面で私の学術的な基礎を培ってくれたのはメイヨークリニックでの留学経験でした。当時のメイヨーには私の関連領域だけでもビッグネームの研究者が揃っていましたが、直接のボスは、私が研究員として所属した血栓症研究室を主宰するDidisheim教授であり、血小板研究で有名な血液学者でしたが、血液内科にはlupus anticoagulantの発見者として有名なBowie教授がおり、循環器内科にはacute coronary syndrome (ACS)の

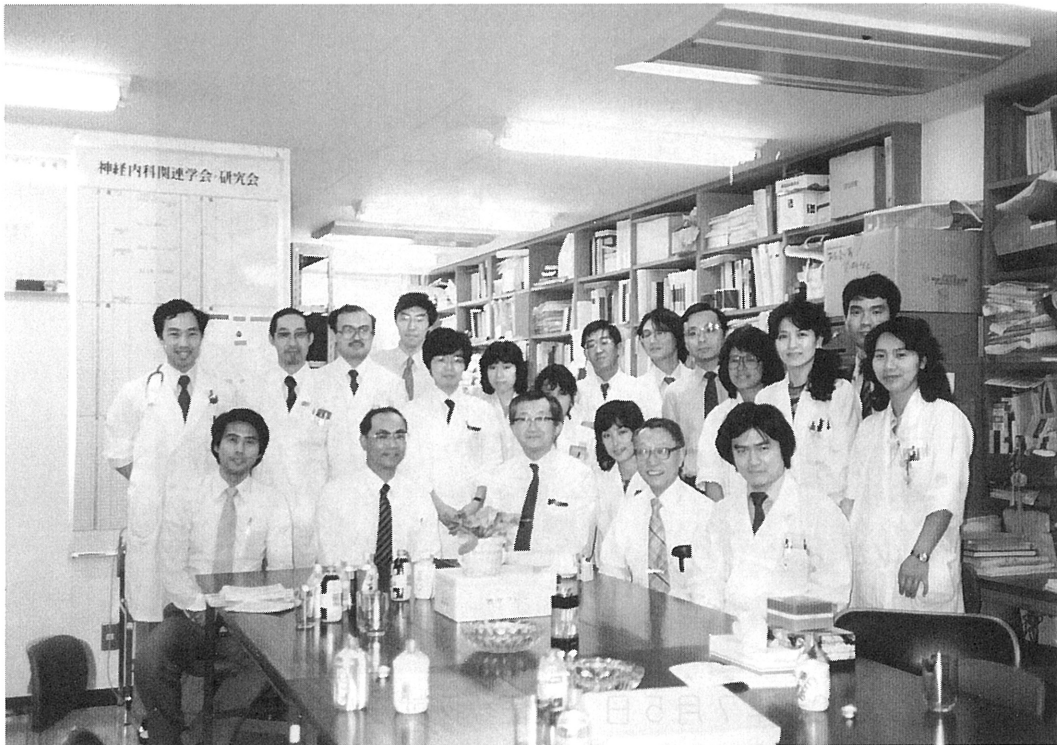
提唱者として有名な Fuster 教授がおり、それぞれの研究室とも共同研究をさせていただきました。また、当時神経内科には柳原教授がおり、病棟回診を見学させていただき、神経病理には岡崎教授がおり、病理解剖を見学させていただいたことも大変勉強になりました。帰国後は、留学経験を活かして脳血管障害患者の血小板機能検査や抗血小板療法の研究を行いました。これらの研究には多くの医局員が関与し、学位を取得し、巣立ってくれました。

また、私の研究活動を知った Oxford 大学の Clinical Trial Research Unit や Cochrane Collaboration から共同研究への勧誘があり、Antiplatelet Trialists' Collaboration, Antithrombotic Trialists' Collaboration, Cochrane Stroke Review Group に所属し、多くのメタ解析に関与し、世界各国へのエビデンス発信に協力してきました。これまでは国内の脳卒中学会、血栓止血学会、脳ドック学会、脳神経超音波学会、栓子検出と治療学会の理事として活動する中でこれらの学会長を歴任してきましたが、最近では、世界脳卒中機構、アジア太平洋脳卒中機構、アジア脳卒中諮問会議の理事として海外の脳卒中の教育活動や啓発活動も行っています。平成 25 年 11 月には、本学主任教授としての最後の締めくくりに国際 TIA/ACVS 会議 (E8~E16 頁参照) を会長として主催しました。海外の著名な脳卒中の研究者に多数参集していただき、2 日間にわたり密度の濃い討論ができ、私にとっては夢のような時間を過ごすことができました。

本特別号をご覧になればおわかりのように、多彩な神経疾患を幅広く診療し、臨床研究を行っているのが当科の最大の特徴であるといえます。このことが、これまでに全国の神経内科学教室の中で最も多くの神経内科専門医を輩出してきた理由のように思われます。研修医にとって、これほど症例に恵まれた神経内科はないと自負しています。私が去った後も、このよき伝統を引き継いで多くの研修医を迎え入れ、教育する教室であり続けることを望むとともに、後任の主任教授とスタッフのリーダーシップとチームワークにより各領域の診療と研究がさらに発展することを願っています。



神経内科主任教授 内山真一郎先生



1984 年医局員集合写真



1989年 医局旅行



2008年7月5日 主任教授就任パーティー





2011年8月1日 Stroke 2011 各学会スタッフ集合（京都にて）



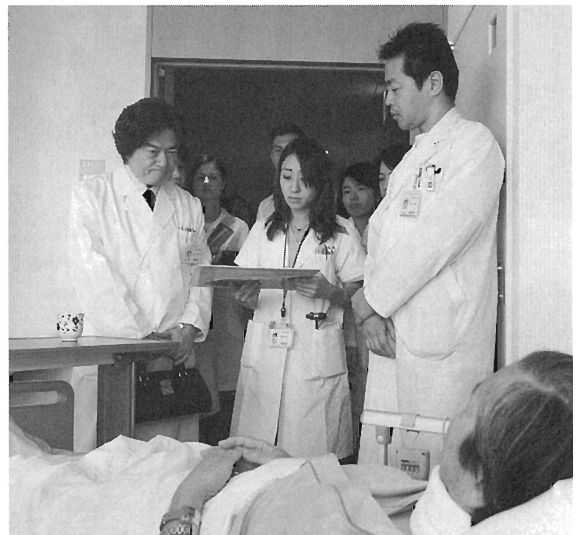
2013年11月15日 International TIA/ACVS Conference にて海外招聘の先生方と全員写真



2013年11月15日 International TIA/ACVS Conference 懇親会



2013年 教授回診 診察風景



2013年 病棟教授回診



2013年 新患プレゼンテーション



2013年 医局全員写真